

〔実践報告〕

インクルーシブ・スポーツ「ブラインドサッカー」実践の成果について  
～ A-pfeile 広島 BFC (ブラインドフットボールクラブ) の活動を通して～

相川 貴裕<sup>1</sup>・加地 信幸<sup>2</sup>

**Results of inclusive sports “blind soccer” practices**  
— A survey of the activities of A-pfeile Hiroshima Blind Football Club (BFC) —

Takahiro AIKAWA, Nobuyuki KAJI

**Abstract**

This is a report on the background of the establishment of the blind soccer team, A-pfeile Hiroshima BFC, by the lead author and the registrants. It includes the results of a questionnaire survey. In 2015, when working at a special needs school for the visually impaired in Hiroshima, the first author focused on blind soccer. Blind soccer is a Paralympic event, which enables those with or without visual impairment to participate in sports, and promotes cooperation among children through competition. It was established with the desire to enable participants to experience the joy of playing sports in groups and according to gender. At the time of the team's establishment, the registrants were four visually-impaired athletes and two instructors, who belonged to the Asahi Medical college of Hiroshima. Currently, 6 visually-impaired athletes, 5 sighted athletes, and 12 instructors are registered. In the questionnaire survey, many players and instructors responded positively to the goals of this activity; thus, it has become one of the few valuable places where visually-impaired people can regularly play soccer in the area.

**Keywords:**

Visually-impaired person (視覚障害者), Blind soccer (ブラインドサッカー),  
Inclusive sports (インクルーシブ・スポーツ)

はじめに

本研究は、視覚障害者と視覚に障害のない者(以下：晴眼者)がともに楽しめるよう、ルールや指導法を工夫してサッカーに取り組むブラインドサッカーチーム「A-pfeile広島BFC」を、筆頭筆者が設立した経緯と、登録者、活動内容および活

動に参加して良かった点や悪かった点についてのアンケート調査の結果を報告したものである。

1. 活動の経緯

A-pfeile広島は、2013年5月に坂光徹彦氏によってアンプティサッカーチームを立ち上げたことか

<sup>1</sup> 朝日医療専門学校広島校 (Asahi Medical college of Hiroshima)

<sup>2</sup> 広島文化学園大学 (Hiroshima Bunka Gakuen University)

ら始まり、現在AFC（アンプティフットボールクラブ）、BFC（ブラインドフットボールクラブ）、PFC（パワーチェアフットボールクラブ）、WFC（ウォーキングフットボールクラブ）が存在する。これは中四国で初の障害者サッカー団体で、この団体を立ち上げた理由は、今現在、身体的にも精神的にも落ち込んでいるかも知れない障害者を太陽の下に呼び出すこと、そのきっかけをサッカーを通して作りたいと思ったことにある。

A-pfeile広島BFCは、2015年に筆頭筆者が設立した。活動を始めたきっかけは、筆頭筆者が広島視覚障害特別支援学校に勤務していた当初、陸上競技、水泳やサウンドテーブルテニスなど個人競技はあったが、団体競技についてはグラウンドフットボールしかなかったため、パラリンピック種目でもあり、視覚障害の有無にかかわらずスポーツが可能であるブラインドサッカーに着目し、児童生徒にブラインドサッカーという団体競技を通じて、協調性や集団でスポーツをする楽しさを経験してほしいという思いから設立した。

ブラインドサッカーは、ゴールキーパーが晴眼者または弱視者で、国内大会においては、フィールドプレイヤーも視覚障害手帳を有する者が2名以上出場していれば晴眼者も参加できることから、障害の有無に関わらず参加できるインクルーシブ・スポーツとして重要な役割を担っている。

## 2. 登録者と活動内容

2015年の設立当初の登録者は、筆頭筆者の勤務先に所属する視覚障害者の選手が4名、指導者が2名で、月に2回程度の練習を行うのみであった。

2017年より週に1回程度練習をするとともに、年に2回程度大会に参加し年間50回程度の活動を通して、日ごろの練習の成果を確認している。

現在は、視覚障害者の選手が6名（特別支援学校3名、小・中学校2名、社会人1名）、晴眼者の選手が5名（全て社会人）、スタッフ、指導者が12名（特別支援学校教諭1名、医療職3名、保護者4名、ボランティア4名）、計23名が登録し、



図-1 日常の練習風景

設立時の約4倍となった。練習（図-1）は基本的に第1～3金曜日および最終日曜日に約2時間行い、大会は特定非営利活動法人日本ブラインドサッカー協会（以下：JBFA）主催の日本選手権と西日本リーグに参加している。

その他、講演会や体験会を開催したり、依頼されたものに参加したりすることで認知度の拡大に努めている。また、ホームページやSNSでの情報発信を通して認知度の拡大と選手・スタッフの募集に努めている。

## 3. 2019年度の活動

2019年度の開催日、会場及び参加者数は表-1に示すとおりである。2019年度も週1回程度の練習を行った。参加者では、特に体験者が増加し、体験者から1名が選手登録をした。

また、2019年度はJBFA主催公式戦「第18回アクサ プレイブカップ ブラインドサッカー日本選手権（以下：日本選手権）」、「西日本リーグ2019（以下：西日本リーグ）」に出場した。日本選手権は1勝3敗でグループ3位（5チーム中）で予選リーグ敗退、西日本リーグは1勝（不戦勝）3敗でリーグ6位であった（図-2、図-3）。

さらに、JBFAナショナルユーストレセンに2名が選抜され、都内近郊で行われる強化合宿に参加するとともに、うち1名は8月21～28日に行われたロシア遠征に選抜された。

その他、広島県立広島中央特別支援学校の推薦を受け、公益財団法人日本生命財団児童少年の健全育成助成を受けた（図-4）。また、体験会（図

表-1 2019年度A-pfeile広島BFCの開催日時, 場所, 及び参加者数

	日にち	場所	参加者(人)				備考
			選手	スタッフ	体験	延べ人数	
1	2019/4/5	広島県立広島中央特別支援学校	4	4	0	8	
2	2019/4/12	広島県立広島中央特別支援学校	5	4	0	9	
3	2019/4/19	広島県立広島中央特別支援学校	5	4	0	9	
4	2019/4/26	i-fut字品	5	4	1	10	
5	2019/5/3	アマノリハビリテーション病院	7	5	0	12	
6	2019/5/10	広島県立広島中央特別支援学校	7	3	11	21	
7	2019/5/17	広島県立広島中央特別支援学校	9	6	10	25	
8	2019/5/26	i-fut字品	6	4	0	10	
9	2019/6/1	港区立港南小学校	5	5	0	10	日本選手権
10	2019/6/2	港区立港南小学校	5	5	0	10	日本選手権
11	2019/6/7	アマノリハビリテーション病院	4	4	0	8	
12	2019/6/14	広島県立広島中央特別支援学校	6	4	10	20	
13	2019/6/21	広島県立広島中央特別支援学校	5	4	11	20	
14	2019/6/30	i-fut字品	7	6	1	14	
15	2019/7/5	アマノリハビリテーション病院	5	4	8	17	
16	2019/7/12	広島県立広島中央特別支援学校	7	5	8	20	
17	2019/7/19	広島県立広島中央特別支援学校	9	4	11	24	
18	2019/7/26	アマノリハビリテーション病院	6	5	1	12	
19	2019/8/2	アマノリハビリテーション病院	8	3	0	11	
20	2019/8/9	広島県立広島中央特別支援学校	10	4	0	14	
21	2019/8/16	広島県立広島中央特別支援学校	7	4	0	11	
22	2019/8/18	i-fut字品	8	3	1	12	
23	2019/8/23	アマノリハビリテーション病院	6	3	0	9	
24	2019/8/30	アマノリハビリテーション病院	7	4	0	11	
25	2019/9/6	アマノリハビリテーション病院	7	4	0	11	
26	2019/9/13	広島県立広島中央特別支援学校	8	5	4	17	
27	2019/9/20	広島県立広島中央特別支援学校	8	4	0	12	
28	2019/9/29	i-fut字品	6	5	1	12	
29	2019/10/4	アマノリハビリテーション病院	7	3	11	21	
30	2019/10/11	広島県立広島中央特別支援学校	7	4	11	22	
31	2019/10/18	広島県立広島中央特別支援学校	8	4	8	20	
32	2019/10/20	i-fut字品	6	5	0	11	
33	2019/10/26	行橋市グラウンド	6	4	0	10	西日本リーグ
34	2019/11/1	アマノリハビリテーション病院	6	5	9	20	
35	2019/11/8	アマノリハビリテーション病院	8	4	9	21	
36	2019/11/15	広島県立広島中央特別支援学校	9	4	6	19	
37	2019/11/16	広島経済大学	10	5	0	15	西日本リーグ
38	2019/12/6	アマノリハビリテーション病院	8	3	1	12	
39	2019/12/13	広島県立広島中央特別支援学校	8	5	0	13	
40	2019/12/20	広島県立広島中央特別支援学校	9	3	1	13	
41	2020/1/4	アマノリハビリテーション病院	6	3	1	10	
42	2020/1/10	広島県立広島中央特別支援学校	9	4	0	13	
43	2020/1/17	広島県立広島中央特別支援学校	5	5	0	10	
44	2020/1/25	i-fut字品	6	3	1	10	
45	2020/2/7	アマノリハビリテーション病院	6	4	0	10	
46	2020/2/14	広島県立広島中央特別支援学校	8	4	0	12	
47	2020/2/21	アマノリハビリテーション病院	6	4	1	11	
48	2020/3/6	アマノリハビリテーション病院	8	4	3	15	
49	2020/3/13	アマノリハビリテーション病院	7	4	0	11	
年間延べ人数			335	203	140	678	
平均			6.8	4.1	2.9	13.8	



図-2 日本選手権集合写真



図-5 体験会の様子



図-3 日本選手権試合の様子

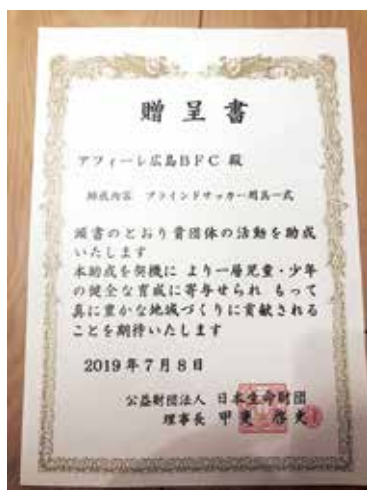


図-4 ニッセイ財団受賞

ー5) や講演会も2回ずつ依頼があり、ブラインドサッカーおよびA-pfeile広島BFCの認知度の拡大につながったと考えられる。

また、新規のサポート企業が1社あり、トレーニングジムおよび鍼灸接骨院を運営する企業であ

るため、定期的なトレーニング指導も受けることが可能となった。

#### 4. アンケート調査と結果

調査の方法は、2020年10月の練習・大会時に参加している選手（視覚障害者5名・晴眼者3名）・スタッフ、指導者（4名）へ活動に参加して良かった点や悪かった点についてのアンケート調査を依頼した。アンケートは視覚障害者に配慮して音声に対応できるGoogle フォームを用いて自由記述で実施した（回収率100%）。

なお、アンケート調査については、個人情報に適正に管理し、目的以外のことについては使用しないことを口頭で説明し、アンケート内容についてGoogleフォームにこれらのことを示し、調査の目的を理解した上で、回答するよう依頼した。

アンケート調査の結果、選手・スタッフ、指導者12名全員が活動に参加して良かった点のみ回答し、悪かった点についての回答はなかった。

##### (1) 選手（視覚障害者）

視覚障害のある選手からは、「サッカーを定期的に行える場があって楽しい」、「サッカーをしている時に目が見えないことが気にならなくなった」などの回答があった（表-2）。

表-2 選手（視覚障害者）からの感想（一部要約，抜粋）

サッカーを定期的に行える場があって楽しい。
サッカーをしている時に目が見えないことが気にならなくなった。
視覚障害があっても工夫や努力で補えることに気づけた。
できないと思っていたサッカーができるようになって嬉しい。
小さいころ普通のサッカーをしていて難しさを感じていたが、今は普通にサッカーができている。

## (2) 選手（晴眼者）

晴眼者の選手からは、「最初はスタッフとして関わりたいと思って参加したが、現在は選手としてともにプレイすることに喜びを感じている」、「最初は恐怖しかなかったが、現在は見えない中でサッカーができる楽しさを感じている」などの回答があった（表-3）。

表-3 選手（晴眼者）からの感想（一部要約，抜粋）

最初はスタッフとして関わりたいと思って参加したが、現在は選手としてともにプレイすることに喜びを感じている。
コンディションの状態によって音声の理解力に影響するのかもしれないと感じている。
目が見えないだけでこんなに世界が違うのだと感じている。
最初は恐怖しかなかったが、現在は見えない中でサッカーができる楽しさを感じている。

## (3) スタッフ、指導者

スタッフ、指導者からは「視覚障害の有無に関わらず競技性の高い活動ができる」、「障害者と一

表-4 スタッフ、指導者からの感想（一部要約，抜粋）

視覚障害の有無に関わらず競技性の高い活動ができる。
コミュニケーションを取ることや相手を思いやることなど、人間として必要なことを一から体験できている。
人を思いやる気持ちの大切さを学んだ。多くの子どもたちに体験させたいと思っている。
障害者と一緒にサッカーができて嬉しい。
周りの人への思いやりを学べる。

緒にサッカーができて嬉しい」などの回答があった（表-4）。

アンケート調査の結果、視覚障害の有無やチーム内での役割に関係なくサッカーを楽しむことができていることや視覚障害への理解が深まっていることが分かった。

## 5. 総合考察

登録者数および視覚障害特別支援学校以外からの参加者の増加、活動内容およびアンケート調査の結果から、A-pfeile広島BFCの活動に対して肯定的な者が多く、本活動は視覚障害者が地域で定期的にサッカーに取り組むことができる数少ない貴重な場となっていることが考えられる。また晴眼者にとっても視覚障害者とともにサッカーを取り組む場となっており、インクルーシブ・スポーツの役割を担っていることも考えられる。

## おわりに

本研究は、ブラインドサッカーチーム「A-pfeile広島BFC」を、筆頭筆者が設立した経緯と、登録者、活動内容および活動に参加して良かった点や悪かった点についてのアンケート調査の結果を報告したものである。2015年設立時に比べ参加者は約4倍に増加し、体験者の参加も増加している。活動日数も設立時の約2倍に増加している。

また、アンケート調査の結果からも、肯定的な意見が多く、本活動が視覚障害者へのサッカーの活動場所になっているだけでなく、インクルーシブ・スポーツの役割を担っていることも分かった。

今後もA-pfeile広島BFCでは、視覚障害者のスポーツの選択肢を広げるとともに、障害の有無に関わらず参加できるインクルーシブ・スポーツの場を提供していきたい。

そして、活動の意義や有効性についても明らかにし、選手だけでなく、スタッフ、指導者や保護者の活動や心の変容についても今後さらに調査・

研究していきたい。

### 謝意

本研究報告をまとめるにあたり、大会期間中にも関わらず、快くご理解とご協力を賜った、A-pfeile広島BFCの選手・スタッフ、指導者の皆様に対し、心より感謝申し上げます。

### 注

本文中に掲載している選手・指導者等の写真については本人または保護者に使用の承諾を得ている。

### 参考文献

加地信幸・河野喬・山西正記・房野真也・森木吾郎・山崎昌廣(2018)「HBG 重度・重複障害児

スポ・レク活動教室「はなまるキッズ」の2017年度活動報告」広島文化学園大学人間健康学研究, Vol.1, pp.67-72.

加地信幸(2016)「特別支援教育時代の体育・スポーツ」大修館書店, pp.184-188

加地信幸・山崎昌廣・河野喬・房野真也・森木吾郎・東川安雄(2019)「重度・重複障害者を対象とした放課後等デイサービスにおける運動プログラム実践研究～開発したアダプテッド・スポーツ用具「ベンチ椅子」の有効性の検証～」広島文化学園大学人間健康学研究, Vol.2, pp.55-60.

草山太郎(2017)「晴眼プレイヤーのブラインドサッカー体験」追手門学院大学地域創造学部紀要, 第2巻, pp.73-91

横尾智治・岩崎彰治(2010)「ブラインドサッカーによる視覚障害者と健常者の交流(2)」筑波大学の属駒場論集50集, pp.153-160.